月刊
名大文学部
第131号
隔月刊行

絵皿の兎の謎
日本文学

名古屋は昔からお茶が盛んな土地柄で、それに伴い古道具業界に勢いがあり、お茶や道具に手を伸ばさない私でも、親しい道具屋さんが幾人かある。彼らから掛け軸の解読をはじめ、さまざまな依頼が寄せられ、勉強になる。これはそんな道具屋さんの一人から見せていただいた染付の皿だ。中国明代末の天啓年間（1621～27）に景徳鎮窯で作られ、貿易品として日本に舶載された品だという。この図柄について尋ねられた。

昔の人の描く絵には基本的に皆意味がある。空を舞う鷹に草原に隠れる二羽の兎。そこにどのような意味があるのだろうか。

こういう時に畏るべき威力を発揮する工具書があって、『俳諧類船集』という。延宝４年（1676）の刊行。芭蕉が活躍するよりも前の俳諧を古俳諧というが、『類船集』とは、古俳諧が消え去る寸前に生まれた偉大な連想語辞書である。古俳諧時代には連句を作るのに、言葉の連想が重視されたために、こんな参考書が作られた。一方、芭蕉以降は言葉の連想を用いなくなるため、同類の書は姿を消す。

同書の兎の項を見ると「快鷹那打臥兎（快鷹なんぞ臥兎を打たん）」という漢詩句が引かれている。そこで室町時代に成った禅語の便利な一覧『句双紙（禅林句集）』を見ると、「師子不食鵰残（師子鵰残を食らはず）、快鷹那打臥兎」と対句の形で載っている。師子は獅子に同じ。鵰残はワシの食い残し。また中国宋代の禅籍『五灯会元』巻 17 には「快鷹不打死兔（快鷹死兔を打たず）」と少し違った形で載っている。絵皿の兎は生きているので、死兔ではなく臥兎の方を描いたものとわかる。

以上の通り、皿の絵は禅語の心を描いたものだった。立派な人はガツガツしてはいけないというような含意だろうか。昔の器物でも絵画でも、鑑賞には文献資料を参照する必要がある。

塩村耕　教授

染付の絵皿

いたずら好きの知恵者
― アフリカの民話と「トリックスター」―
文化人類学

広大なアフリカ大陸には熱帯雨林、サバンナ、砂漠、地中海性気候帯など多様な自然環境がみられます。野ウサギは、このうち熱帯雨林と砂漠をのぞくアフリカ全土に生息しており、各地で民話の題材になっています。

カメルーンのフルベ人の民話では、野ウサギは野原の王様であるゾウ、川の王様であるカバにそれぞれ力比べを提案しますが、長い鎖の両端をゾウとカバに握らせ、ゾウとカバだけが力比べに熱中して疲れ果てます。いたずらに気づいたゾウとカバは野ウサギを探しますが、ウサギは死んだ鹿の皮を被り、「ぼくは、〈見た者も見られた者も死ぬ〉っていう体になったのさ」とうそぶきます。それを聞いたゾウとカバは死にたくないので一目散に逃げだし、野ウサギは王様たちのいなくなった場所で食べ物にありつきます。

タンザニアのスワヒリ人の民話では、野ウサギは百獣の王であるライオンに食べられそうになりますが、その都度、逆にライオンをやり込めます。同じような民話は、ボツワナなど南部アフリカのコイサン諸族の間でも伝わっています。また、エチオピアと南スーダンのアニュア人の間では、伯父さんに魚の上手な捕り方を教えると騙して、棘だらけの魚の群れに背中から飛び込ませる、いたずら者の野ウサギの民話も伝わっています。

アフリカには、数え方に応じて 800～1800 もの異なる言語を話す人びとが暮らしていますが、野ウサギをいたずら好きで、すばしっこい知恵者とみなす点は共通しています。このような利口ないたずら者は既存の秩序をひっくり返し、時に社会を革新しますが、アフリカに限らず世界中の民話や神話に登場します。文化人類学者のポール・ラディンによって「トリックスター」と命名されたこれらの存在は、人間の想像力の豊かさとともに、ある種の共通性も示唆する興味深い研究主題なのです。

佐々木重洋　教授

左：『語りつぐ人びと ― アフリカの民話』（江口一久ほか著、福音館日曜日文庫、1980 年）
右：『お話は土の城のテラスで ― 西アフリカ・トーゴの昔話集』（和田正平著、メディアランド、2016 年）
＊背景の布は、カメルーンの市場で買ってきたものです。

月に兎がいる理由
インド哲学

サンスクリット語で月のことを「シャシン」（兎をもつもの）といいます。インドのひとびとは古代から月に兎の姿を見てきましたが、紀元前に成立したとされるジャータカ文献にも、これに関する話がみられます。ジャータカは、お釈迦さまがお釈迦さまとして生まれる前、過去世に為したさまざまな善行を伝える物語です。ある逸話によりますと、お釈迦さまはかつて、賢い兎でした。あるとき、兎はバラモンの行者に食事を施すことになりました。施しは、自分が食べるはずのものから供さなければなりません。兎は困ってしまいます。兎の食べ物は草ですが、バラモンは草など食べないでしょう。そこで兎は、自らの身を焼いて、バラモンに食べ物として施与することにします。バラモンに扮して兎の決意の揺るぎないことを確かめたインドラ神は、兎の優れた行いを讃え、それを永遠に記念するため、月に兎の姿を描きました。（なお、兎はインドラ神の幻術で救われ、命拾いします。）

この逸話は平安時代の『今昔物語集』にも収録され、古くから日本人の心にも刻まれてきました。しかし、現代のわたしたちには、これを「良い話」としてしまうのは難しいでしょう。この物語は、自らの命を布施として捧げることを肯定します。宗教団体に対するお布施の問題は、昨年の後半、大きな社会問題として毎日のようにニュースで取り上げられました。その観点からすると、いまの話は危険思想そのもののように聞こえるかもしれませんが、そう断じてしまっては問題の本質はみえてきません。古代の物語が古代人に何を伝えたのか、また現代人に何を教えうるのか、文学部ではそんなことを、月の兎を眺めながらじっくりと考えています。

岩崎陽一　准教授

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2023 年 1 月 10 日発行